



オノ・ヨーコさんと親しく交流するようになったのは1974年8月のプラスチック・オノ・バンドの東京公演がきっかけでした。ジョン・レノンと出会う前に映像作家との間に生まれた娘をテーマにした歌があり、ヨーコさんは長い髪を振り乱し、金切り声で叫ぶように歌っていました。深く傷つきながらも必死に闘う女性の姿を見た思いで、雑誌にコンサート評を書き、それを見たヨーコさんから連絡をもらいました。

△プラスチック・オノ・バンドは、ビートルズ解散直前の69年、ジョンと妻

音楽は愛 湯川 れい子 18

のヨーコを中心に結成。ジョン亡き後は2009年、息子のシヨーンら加わって活動を再開。最初、東京でお会いしたのは、ヨーコさんとジョンが別居していた時期。しばらくして75年2月14日のバレンタインデーに、ヨーコさんから、「ジョンが帰って来たク」という喜びの電報を受け取りました。ジョンは、用意されていた花柄のパジャマを着て、子供のようにはしゃいだといま

す。その年の10月、シヨーンちゃんがジョンと同じ誕生日に生まれ、半年後に私も息子を出産。「ジョンは離乳食に玄米をすり潰して入れている」など、子育ての情報を教えてもらった。個人的な悩みを相談したりするようになりまし

た。77年夏、ご家族3人で東京に滞在、私は初めてシヨーンと話をしました。初来日したビートルズを突撃訪問した66年、ジョンだけが口をきいてくれなかったのですが、「あの時はごめんね。権力を使って近づいて来る人ばかりで、うんざりだったんだ」と、打ち明けてくれました。エルビス・プレスリーの話もしました。77年8月、エルビスが亡くなり、私は米メンフィスの葬儀に駆けつけました。お土産に当日の現地紙を渡すと、シヨーンは、「唯一プロデュースし

たかったのはエルビスだった」と。「素晴らしい才能を持った人間とすごい力のあるマネジャーが出会って食うか食われるかのぶつかり合いを経て、初めてスーパー・スターが生まれる。ヨーコがいてくれたから、僕はこうして生き残っている」と、含著のある言葉が印象的でした。△80年、シヨーンが7歳になったのを契機に、子育てに専念していたジョンは

ジョンとヨーコ 深い絆



とは、かたくなになつた（左）と、ジョンが亡くなくなつた（右）に会うようになった。オノ・ヨーコさん（左）とシヨーン（右）より親密に（1987年頃、湯川さん提供）

音楽活動を再開する▽

12月、ヨーコさんから、新しいアルバムをPRをしたいと申し出があり、ニューヨークのスタジオと回線をつないでラジオ収録。シヨーンから、「また日本に行くね。メリー・クリスマス」とメッセージをもらいました。彼が凶弾に倒れたのは、その4日後でした。

ジョンの死後、私が21世紀の力ぎを握る楽曲と考える「イマジン」についてヨーコさんに聞く機会がありました。2人は時にせめぎ合い、また深く愛し合っ

（編集委員 永峰好美）